おくのほそ道の風景

籬島

まがきじま

その3

籬神社奉賛会

～政宗が育んだ“伊達”な文化～

籬が島・日本遺産認定

籬神社神事のご案内

・月次祭　毎月　1日　午前11時
（但し1月は6日午後1時）
・前夜祭　7月31日　午後3時
・本祭　8月　1日　午後1時

いずれも、島内籬神社にて執り行います。
どなたでも参拝できます。

通常、橋の扉は施錠していますが、毎月1日と土曜日曜祝日は、午前10時解錠、午後4時施錠しています。

籬が島 HP

政宗が育んだ伊達な文化
構成文化財 32「籬が島」

鹽竈神社 HP
曲木神社の御由緒

籬島 その3 令和8年5月発行

【和歌の名所籬島】

みちのくは　いづくはあれど　塩竈の
　うらこぐ舟の　網手かなしも　（古今和歌集）

卯の花の　咲ける垣根は　みちのくの
　まがきの島の　波かぞとみる　（拾遺集）

籬島及び鹽竈の浦の名は、八世紀（七二四）多賀城に国府陸奥鎮守府が設置されたころ、遠く京、奈良の都よりたくさんの都人、役人が下向し、その景観を謳歌したことにより始まる。

当時塩釜は寂しい一寒村にすぎなかったが、一躍国府の津（港）として急速に発展し、その名も、そのまま国府津又は国府千家と呼ばれ殷賑を極めた。その千家を巨たる洋上十八町余り、籬島はみちのく随一を誇る風光明媚な島として、和歌の名所となって、天下に知られたのであった。

又、塩釜の浦について「伊勢物語」に「みちのくの國にいきけるに、あやしうおもしろき所々おほかりけり、みかど六十余国の中に塩竈という所に似たる所なかりけり云々」の、くだりあり、歌と共に塩釜の名声振りを窺う事ができる。

こうして籬島を詠んだ名歌は数多く、次にその著名な和歌をあげてみよう。

あけくれは　まかきか島を　なかめつつ
　都戀しき音をのみそなく　源信明朝臣

わかせこを　都にやりてしほかまの
　まかきか島の　まつそ久しき　古今和歌集

さてもなほ　笆のしまの　ありけれは
　ちよりぬへく　おもほゆるかな　源清陰朝臣

みちのくの　籬が島は　白妙の
　波もてゆへる　名にこそ有けれ　大納言為家

ゆうやみに　あまももしほ火と　見へつるは
　笆島の　蛍なりけり　古今和歌集東歌

春風に　波や織けむ　陸奥の
　籬か島の　むめのはな貝　俊頼朝臣

卯花の　咲か籬の島人の
　衣をほすか　舟よせて見む　拾遺和歌集

霜寒み　笆の島の　冬枯に
　波の花もや　色かはるらん　土御門院御制

こころから　籬の島のまつとたに
　都につけよ　塩竈の月　家隆

海士の住　笆の島の　波のまに
　しほやき衣　かけてほすなり　知家

うしろめた　末の松山　いかならん
　籬の島を　こゆる藤なみ　源信明

別れにし　秋ののこりて　きくの花
　匂ふまかきの　島に有けり　権中納言家定

過ぬとて　おしみしきくの　咲きのこる
　笆の島に　とまるなりけり　権中納言通俊

【「奥の細道」に登場の籬島】

芭蕉は、元禄二年五月八日、仙台芭蕉の辻を起点に多賀城壺の碑、末の松山、沖の石、野田の玉川を経て塩竈に。この日、塩釜に泊まる。

翌五月九日朝、鹽竈神社に参拝。舟にて途中籬の景を眺めて松島に向かう。松島に向かうその情景を、次のように残している。

「それより野田の玉川沖の石を訪尋ぬ。末の松山は寺を造て末松山といふ。あひあひ皆墓はらにて、はねをかはし枝をつらぬる契の末も、終はかくのごときと悲しさも増りて、鹽がまの浦に入相のかねを聞。五月雨の空聊はれて、夕月夜幽かに籬が嶋もほど近し。蜑の小舟こきつれて、肴わかつ聲ごえに、つなでかなしもとよみけんこころもしられていと哀れなり　・・・」

右紀行文中「籬が嶋もほど近し」の一句に注目してみると、芭蕉は既に名に負う籬島を見んものと、その期待も大きく、塩釜を船出したものと思われる。

社殿造営四十周年記念誌
滝井博著「籬島思考」より
（平成三年発行）